

政治を動かす

参院議員・比例候補

井上さとし物語

井上氏は、広島市の平和公園に「平和の子の像」が建立された1958年5月5日に被爆2世として生まれしました。入学した高校の先輩の多くが原爆で命を奪われたことを知り「どうしてこんな理不尽が許されるのか、おかしいことはおかしいと頭（こころ）を上げて立ち向かう生き方したい」と決意。進学した京都大学では学内暴力が横行しており「戦争も暴力もおかしい」と立ち向かう中、日本共産党に入党します。

梅田勝衆院議員の秘書や赤旗記者、党京都府委員会の専従を経て、2001年の参院選当選以降参院議員として活躍します。安保・外交問題を担当し、アメリカ言いなりの戦争する国づくりを許さず、憲法9条に基づく平和の日本と東アジアを求めてきました。

理不尽に立ち向かう

■大軍拡と対決

安保3文書の閣議決定に基づく敵基地攻撃能力保有、武器輸出拡大など戦争できる国づくりを進める自公政治に真っ向から対決。国立病院機構などの積立金、東日本大震災のための復興特別税など国民

の医療や福祉を充実させるための財源の軍拡への転用を止めるよう論戦してきました。

個人情報の収集も可能にする土地利用規制法の危険性を指摘し、廃止を求めてきました。

■核廃絶の思い

原爆投下時、女学生だった井上さんの母は、投下後に避難してきた多くの被爆者を救護し、被爆。しかし被爆手帳を取得したことを聞かされたのは30歳の頃。「姉が結婚するまで話すのを待っていたのではないか。一番身近な人にもこんな思いをさせるのが原爆なんだと痛感した」と話します。



核兵器禁止条約の国連会議に出席する井上氏（左）と志位和夫委員長、笠井亮衆院議員＝2017年7月、国連本部、肩書は当時

それだけに核兵器廃絶への思いは強く、参院議員では唯一、17年の核兵器禁止条約採択の国連会議に参加、「日本は戦争被爆国として条約を批准し、核兵器廃絶の役割を果たすべきだ」と求めてきました。ノルウェー大使館主催の日本被団協のノーベル平和賞受賞祝賀会にも参加し決意を新たにしています。「被爆者の訴えが、核の管理から核廃絶に世界を動かした。にもかかわらず核兵器の非人道性を一番知る日本政府が核兵器禁止条約の批准に背を向けていることは恥ずかしい。国会から批准に向けて頑張りたい」